



■水稲

平成29年産水稲栽培に向けた土づくりについて

「稲は地力でとる」といわれるように、水稲を栽培する上で土づくりは最も大切な作業です。土づくりを行うと、稲体の活力維持、玄米の登熟向上等により、米の品質向上・収量増大が期待できます。

稲わらをすき込むと、稲わらは土壌中で分解されて腐植となり、土壌をやわらかくし保肥力を高めます。

また、稲わらにはケイ酸が多く含まれており、稲の茎葉を硬くして倒伏や病害虫に対する抵抗力を高めます。

稲わらのすき込みは有機物の分解を促す為、できるだけ年内に行います。

また土づくり肥料の散布は、玄米の品質向上・収量増大に寄与するだけでなく、近年食の安全を脅かしているカドミウム吸収を抑制することができます。

カドミウムは、土づくり肥料を散布し土壌のpHを高めることによって、食物の根から吸収されにくい状態になります。

そのようなことから平成29年産水稲には、必ず土づくり肥料を散布し、カド

ミウム吸収抑制対策を実施しましょう。

■大豆

大豆の収穫について

大豆の成熟期は「葉が完全に落葉し、茎の大部分が褐変し、子実が品種特有の色を呈して、茎を振ればカラカラと乾いた音がする時期」です。汎用コンバインによる収穫の時期は、成熟期から一週間以上過ぎ、ほ場での乾燥を促進させて、茎がポキッと折れる頃です。

ただし、茎水分が下がった収穫適期であっても朝露が残っている時刻（天候条件、地域にもよるがおおよそ午前10時以前）の収穫は汚損の発生割合が高くなりますので、朝露の無くなる日中に作業を行いましょう。

また、イヌホオズキ等の雑草が混入すると汚損粒が発生しやすいため、事前に雑草や青立ち株を除去しましょう。



■エンドウ

手軽にできる有機ベランダ栽培

エンドウ

さやごと食べるサヤエンドウには、昔ながらのキヌサヤと比較的新しいスナップの2種類があります。さらに、つるあり種とつるなし種があり、つるあり種は長い支柱が必要ですが、つるなし種は長い支柱はコンバクトですが支柱は立てます。つるが短い分、早く収穫できますが収穫量はやや少なくなります。ベランダの状況を考慮し品種を選択しましょう。

種まきは、暖かい地域では秋まきに、越冬が困難な寒い地域では春まきにします。秋まきでは早まきは厳禁です。早くまき過ぎると越冬時に株が大きくなり過ぎて寒さにやられてしまいます。耐寒性が最も強い本葉2〜3枚で越冬させるのが理想なので、温暖地での種まきは11月下旬が目安です。12月にずれてしまうとビニールトンネルの保温が必要です。春まきはビニールトンネル内で3月に種まきをします。

コンテナは深さ20cm弱の大きさがあれば十分ですが、土は新しいものを使います。連作すると発芽不良や根腐れ、早期枯れ上がりなどの連作障害が出やすいためです。

種まきは、株間15cmで、必ず1条の点まきにします。瓶の底で鎮圧して深さ3cmのまき穴を作り、1カ所に4粒まき、2〜3cmに覆土してこぶしで鎮圧します。本葉2枚の頃にはさみで地際を切り、1カ所2本に間引きします。

肥料は、秋まきでは本葉2枚のときと3月上旬・下旬にぼかし肥20gを施します。つるあり種では長めの支柱を立てつるを誘引します。収穫はキヌサヤは開花後20〜25日が目安です。中の実の膨らみが外からわずかに見え始めた頃が適期です。取れば取るほど次から次と実がなるので、柔らかいうちにどんどん収穫します。若取りはつるへの負担が少なく、多収になります。スナップエンドウは実が十分に膨らんだら、緑色が鮮やかなうちに収穫します。多少取り遅れてもさやは柔らかいのですが、こちらも早めに収穫する方が、株が疲れず多収になります。

